

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
第2号(2015年度) 2016年3月発行

アジア諸国における漢語教育と
華僑・華人の民族アイデンティティ
—カンボジア、タイ、インドネシア、ベトナム調査から—

大塚 豊

アジア諸国における漢語教育と 華僑・華人の民族アイデンティティ —カンボジア、タイ、インドネシア、ベトナム調査から—

大塚 豊*

Chinese Language Education in Asia and the Identity of the Ethnic Chinese: Some Findings
from Surveys in Cambodia, Thailand, Indonesia and Vietnam

Yutaka OTSUKA *

ABSTRACT

The first part of this paper is an overview of the historical changes of Chinese language and its education in four Southeast Asian nations. All of these nations experienced a blank period when Chinese language was oppressed or forbidden to be used by the rulers of the time, although length and austerity of the blank period differs from nation to nation. However, as their relationship with the People's Republic of China in the international political arena improved and economic exchanges have been revitalized, a different scene from the previous era can be observed in the attitudes toward overseas Chinese and their language. Questionnaire surveys were carried out for several years to make clear how the situation of the Chinese language (as an ethnic language of overseas Chinese as well as a foreign language) education looks like. In total, responses from 2,458 pupils and students were collected. Statistical analysis of the responses by nation and the comparison of responses from Chinese and non-Chinese youth led us to some findings of how different conditions of each country gave rise to influence to the way Chinese language education is carried out and the consciousness and ethnic identity through language is being formed.

キーワード：アジア、華語・漢語教育、華人・華僑、民族アイデンティティ

1. はじめに

英語が国際的なコミュニケーションの主要言語であり続けるであろうことは確かだが、主要国はグローバル化する世界の中で自国語の地位を主張し、その維持と普及に努める状況が見られる。英語による覇権ないし一極集中に挑戦するかのように、中国語の使用も最近際立って増えてきた。言語別に見た世界のインターネット利用者数では、2015年半ばの時点で英語の26.0%に次ぐ21.5%を占め、2000年から2015年の間に、中国語で通信するインターネット利用者は2,080.9%増加した¹。世界人口に占める主要言語の分布では英語を凌駕しているという統計もある²世界語としての漢語(中国語と

*大学教育センター教授

同義)のもつ意味は小さくない。「海水のあるところには華人がいて、華人のいるところでは華語教育を欠くことができない³⁾」という諺もあると言われるが、東南アジアは華僑・華人が最も早く、かつまた最も多く住みついた場所として、彼らのエスニック言語としての華語の教育の歴史は長く、曲折を経ながらも続けられてきた。加えて、孔子学院の世界展開に代表されるように、中国政府は自国語の対外的な普及ないし対外言語教育を積極的に展開してきている。こうした中国による漢語普及策をめぐる諸現象や営為には、例えば、担当教員の養成と提供の在り方、必要経費や教材の提供方法、教材に含まれる文化的・イデオロギック的要素のもたらす影響など教育学的な分析や検討に値する多くのトピックが含まれる。

華人・華僑をめぐる諸課題については、わが国では拓殖大学華僑研究センターのような専門研究機関があり、海外では多くの華人・華僑の父祖の地である華南地域の暨南大学華僑研究所や華僑大学華僑華人研究所、台湾の国立暨南国際大学東南アジア研究所のような専門機関において積極的に研究が展開されており、歴史研究をはじめとする研究蓄積は枚挙に遑がない。その中には各地での華語・漢語教育問題の検討も含まれている。しかし、華語・漢語教育を受ける子ども達の意識という視点から現地調査を踏まえて明らかにしたものは少なく、とくに華人の血統を引く華裔と当該地の非華裔との比較や数か国の比較という視点から論述したものは、管見の限り、ほぼ見当たらない。

そこで小論では、中国の対外言語教育政策と言語を通じての華人のアイデンティティ形成という視点に立って、まず上記の専門機関などでの先行研究に依拠しつつ、東南アジア4か国における華語ないし漢語教育の変遷を大まかに論じる。その後、筆者が各国で数年来実施してきた華語・漢語教育に対する児童生徒の意識調査から得られた若干の知見を明らかにすることとしたい。

2. 各国における漢語・華語教育の変遷

(1) カンボジア

カンボジアと中国との往来の開始は古く唐代に遡るが、1863年からのフランス統治時代には移住する中国人が増加し、華僑社会が次第に形成された⁴⁾。植民地政庁は華人政策として「幫」への加入を義務づける幫公所制度を採った。幫とは、異境にあっても元来同郷や同族であるとか、同業に従事している者同士が組織し、経済的活動を中心とする互助的な団体である。その結果、潮州幫、広東(広肇)幫、福建幫、海南幫、客家(客属)幫の会館が設置された。各幫は1914年に潮州幫がプノンペンに端華学校を創設したのに続き、それぞれのアイデンティティを主張するかのようになり、独自の学校を設置した。1930年代初頭には5つの幫の学校が存在していた。福建幫の民生学校、広肇幫の広肇恵学校、海南幫の集成学校、客家幫の崇正学校である。第二次大戦後の1950年代以降、多くの華僑がカンボジア国籍を取得し、カンボジア華人となった。1950年代から60年代にかけて華人・華僑学校は発展を遂げ、全土に200校余り、在籍する小中学生数は5万人余りに達した。そのうち、プノンペンには50校余りが存在し、なかでも端華学校は最大規模であり、4,500人もの児童・生徒が学んでいた。多くの学校は小学校、中学レベルであったが、プノンペンの端華学校および民生学校、バタンバン州の国光学校、クラチェ州の中山学校では高校レベルの教育が施されていた⁵⁾。しかしながら、1970年、ロンノル政権は華人が華語を使うことや華語教育を全面禁止し、華語学校を閉鎖するというように、華人・華僑を圧迫した。1975年から1979年の極左政権クメール・ルージュの時代にも華人は肅正や迫害の対象となり、ベトナムによるカンボジア侵攻期の国外避難などを経て、80年代初めまで華僑・華人の人口は減少した。しかし、相対的に平和な時代の到来とともに、華僑・華人は不死鳥のように蘇り、その数も次第に増大し続け、2015年の総人口1,586万4,000のうち、華人・華僑は22万3,300人(1.4%)と、ある統計は示している⁶⁾。こうした中で1990年代末から、華語教育は回復してきた。1991年10月、陳薯氏の努力によりコンボンチャーム省モーメット県の啓華学校がまず授業を再開した。プノンペンでも小規模な私塾的補習クラスのようなものでは人々のニーズを満たせなくなり、1991年から92年にかけて、中央学校、坡隆辺学校、立坡学校、莎麗娜学校、華群学校、培文学校が相次いで開校した。プノンペン以外では、バタンバン省バタンバン市の聯華学校、コンポト省コンボ

ントラジュ市の覚群学校、クロチェ省クロチェ市の中山学校が前後して授業を再開した⁷。中国政府はカンボジア華人の互助組織である東華理事総会を介して積極的な支援を展開している。しかし、その後襲ったアジア経済危機などの影響から、華語教育は必ずしも順風満帆とは言えない。各華語学校はクメール語とのバイリンガル、あるいは英語も加えたトリリンガル教育を実施するなどの経営努力を行っている。

(2) タイ

タイには2007年時点で総人口の10%強に当たる約700万人の華人がいたとされるが⁸、別の統計では160万人弱という数字もある⁹。タイ政府がエスニック集団毎の人口統計を出していないために、推計値が大きく異なるが、いずれにせよ、タイ華人のほとんどが19世紀以降に華南地域からタイにやって来た労働移民やその子孫であり、出身地別に見れば潮州系が圧倒的に多い。彼らの「母語」は本来潮州語や福建語であり、華人社会にいわゆる「華語（標準中国語）」が共通語として普及したのは、中華民国成立後の1920年代以降のことであったとされる。中国本土でのナショナリズムの昂揚や華語の普及に影響され、タイ華人の間には、幫を越えた「中国人」としての共通のアイデンティティが生まれた。一方で、1932年の立憲革命を経てタイでもナショナリズムが高まり、華人の中国ナショナリズムと対立した。

タイでは、14世紀以降、華人が私塾を設けて「四書五経」を子女に教えていた事実が見られ、20世紀に至ると、1932年に立憲君主制に移行するまでは、タイ政府の華語教育に対する放任的態度の下で、各幫が新民学堂、大同学堂（後に南英学堂と改称）、宏華学校、育才学校、進徳学校、明徳学校、培元学校、培英学校など多くの華語学校を創設した¹⁰。ラーマ6世が1918年に制定した「私立学校法」および1921年の「義務教育実施条例」は、当初それほど厳格に執行されることはなかったが、1932年に立憲君主制へ移行した後に状況が変わって厳格化が進み、漢語の週当たり授業時数が6時間以下に制限され、政治的内容を含む教科書の使用が禁止されたほか、1933年～35年間に300校近くの華語学校が運営を停止した¹¹。こうした困難に直面しながらも、1932年から39年にかけての時期、タイにおける華語教育はなお発展を続けた。というのも、厳しい華語教育政策は経済的実力を握る多くの華僑・華人の不満を呼んだことにより、タイ経済に悪影響を及ぼしたために、タイ政府は政策の手直しを図らざるを得なくなったからであり、その一方で中国の国民政府が華語学校への支援を行ったからであった。

但し、1938年にピブーン・ソングラムが首相の座に就くと、親日排華政策の下で統制は徹底され、当時存在した294校の華語学校がすべて姿を消すという、タイの華語教育史上で最大の挫折期を迎えた¹²。第二次世界大戦後になると華人学校が再開され、1945年から48年にかけては東の間の繁栄の時期が訪れた。しかし、1949年に中華人民共和国が建国されて以降、反共陣営の一角を占めるタイでは、再び華語の学習時間が制限されたり、学校閉鎖の措置がとられたりするなど、文字通りの紆余曲折の道を辿った¹³。

長い空白の後、1992年、首相アーナン・パンヤーラチュン率いる内閣の閣議決定により、そうした厳しい統制が緩和された¹⁴。また、2006年1月11日のチャトゥロン教育大臣と章新勝中国教育部副部長の公式会談ならびにそれに伴う対タイ華語教育支援に関する協定が結ばれると、中国による手厚い援助が始まった。国家対外漢語教学領導小組弁公室（以下、国家漢弁と略記）を実施主体とする中国からの華語教育ボランティア教員の派遣や華語担当教員の研修事業、孔子学院や孔子課堂の設置などである。タイ教育省は2007年度に全国の20か所に中国語教育センターを設立し、教授法やカリキュラムの標準化を図るとともに、中国語教員養成コースを開設することを決めた。しかし、こうした動きは華人を対象として民族語を教えるものではなく¹⁵、あくまで英語や日本語など他の外国語と同列に中国語を教えるためのものである。その後2010年に両国の国交正常化35周年を迎えるに当たって、タイでは更なる華語教育ブームが出現した。

(3) インドネシア

現在、インドネシアの華人人口は約 740 万人で、総人口の 3.5%前後を占め、同国における最大の少数民族となっている¹⁶。インドネシアにおける華語教育の歴史は、1690 年にヴァタビア（現ジャカルタ）に華僑が初めて開いた華語私塾の明誠書院まで遡ることができる。その後、華語を教授用語とする伝統的な私塾が各地に開かれた。教えられた内容は四書五経であり、福建や広東出身の華人商人が開いたものであり、教員も福建語や広東語を用いて教えた。20 世紀に入り、1901 年 3 月 17 日には華僑が近代的な学校の先駆けである巴城（ヴァタビア）中華会館中華学校を創設した。次いで 1906 年には、中華總會（翌 1907 年にジャワ学務総会と改称）が創られ、同会はインドネシア全土における華語教育を統括する組織として機能した。近代学校は上述した私塾と異なり、華語や歴史の他に、算数、地理、英語、体操など近代科目を教えるようになった。教授用語も福建語や広東語ではなく、「国語」「マンダリン」などと呼ばれ、北京語を基本とする標準中国語に変わっていった。しかしながら、やがてオランダ植民地政府による圧迫や戦火の下で華語教育は衰退し、3 年半の日本統治時代にも華人は圧迫の対象であった。第二次大戦後、独立後の新政権の華語教育に対する比較的寛容な政策の下で、華語教育は再び興隆する兆しが一時は見えた。1957 年にインドネシアの華語学校は 200 校近くあり、生徒数も 42 万 5000 人余り¹⁷に達していたが、華語教育の余りの隆盛に懸念を示したスカルノ政権はやがて華語学校に対する各種の制限を加えるようになっていった。すなわち、華語学校の新設を禁止し、インドネシア国籍の学生・生徒が華語学校に通うことを禁止し、華語学校の設置区域に制限を設けた。さらに、1965 年の 9 月 30 日事件を機にスカルノ政権が崩壊すると、政権を握ったスハルト大統領の下で、華語教育はさらに深刻な局面を迎えることになった。スハルトは華人に対するインドネシアへの同化政策を徹底して推進し、華語の使用を禁止し、華語学校を閉鎖した。かくして、事実上 30 年余りにわたって漢語や華語の教育が抑圧され禁止される状態が続き、長い空白期が出現した。しかしながら、国際政治舞台において、大陸中国との関係が改善し、経済交流が深まるにつれて、インドネシア国内の華人とその言語に対しては未曾有の変化が生じた。華語の使用を禁じてきたこれまでの政策の見直しが図られた。さらに、ワヒド、メガワティ、ユドヨノの各大統領の政権下で華語に対する理解と寛容な政策はいつそう強化され、積極的に漢語教育を推進する方針が採用され、外国語科目の 1 つとして中国語が学ばれるようになった。2000 年末から 2001 年初めに、インドネシア教育省は中国教育部および駐インドネシア中国大使館文化部と協力し、教育省内に「華語補習班想像協調処」を設け、教材の統一を進め、中国から派遣される漢語教育顧問を教育省に常駐させ、中国による中国語能力検定試験である HSK 試験の実施に関する一連の措置を講じるなど、漢語教育をめぐる両国関係の強化を図った¹⁸。

(4) ベトナム

華人はベトナム国民を構成する 54 の民族の 1 つである。2015 年時点のある統計では、ベトナムの総人口約 8400 万人のうち、華人の人数は 189 万 1,000 人（2.0%）であり¹⁹、そのうちの約半数はホーチミン市に居住しているといわれる。華語教育はそうした少数民族としての華人（華族）の言語や文化を維持継承するためのものと考えられ、外国語としての漢語（中国語）教育とは一線を画するのが普通である。華語教育はホーチミン市の中でも華人がとくに集中して住んでいるのは第 5 区（チョロン地区）を中心に、第 6、11 区などで実施されている。また、全国的に見れば、ホーチミン市の他に、ビンズオン省、ドンナイ省、ソクチャン省、カントー省といった南部諸省でも華語教育が実施されている。

国境を接する中越両国の間では古代から人の行き来があり、ベトナムに華人が定住するようになった歴史は千年以上も以前に遡るとされ、とくに 17 世紀の明末から清初にかけて、明の遺臣が大挙してベトナムへ移り住んだ。また、フランス植民地下の 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、サイゴン（現ホーチミン市）は東南アジアにおける一大貿易拠点として、多くの華人を引きつけた。その後、1954 年から 20 年間にわたるベトナムの南北分断状況の中で、南部では経済界を華人が支配する状況が見

られ、華人はベトナム社会に根を下ろしていた。だが、1975年の南北統一後、共産主義下での圧迫を恐れた華人は国外へ去り、さらに中越両共産党の路線対立から勃発した1979年の中越戦争前後には国外に流出する華人の数がいっそう増加した。こうした中越両国の不正常な関係の下で、ベトナム華人の勢力は極端に衰退し、華語教育ならびに漢語教育は80年代初頭から1992年頃まで10年余にわたって実質的に中断あるいは停滞した。

しかしながら、1986年末にベトナム政府が従来の計画経済を修正して市場経済に転換し、いわゆるドイモイ政策を導入したのに伴い、積極的に海外との交流を進める中で、華人の人脈は外資と技術の導入において大きな役割を果たし、台湾、香港、シンガポールなど華語使用地域の投資家がベトナムへの外資導入の主力になった。こうした状況の下で、20年ほど前からは中越関係の雪解けムードが生まれ、外国語としての漢語および少数民族の母語としての華語に対する需要が徐々に高まり、各種の教育活動が展開されるようになった²⁰。それを実質的に支えたのはやはり華人・華僑であった。

3. 質問紙調査結果から見た漢語学習に対する児童・生徒の意識

以上述べてきたように、各国はそれぞれの華語・漢語教育の展開に辿って今日に至っている。そうした変化の中で、華語・漢語教育に対して初等・中等学校の児童・生徒はいかなる意識を持っているのかを明らかにするため、筆者は数年来、4か国で質問紙調査を実施してきた。中国語と各国語の両言語で作成した質問表を、主として筆者自身が担当教員の協力の下に各教室で配布し回収することに努めたが、外国人のみでは調査が困難な状況もあり、各国とも部分的に協力者の支援を受けた²¹。調査対象地域・学校として選んだのは、国によっては華語・漢語教育が始まって間もなく、国土の全域で実施されているとは限らないため、教授言語として漢語を採用している華人学校であったり、相対的に華人住民が多く居住し、漢語が教育の一環として導入されていたりする地域に絞った。カンボジアでは漢語が広く一般の学校で教えられているという状態ではないので、華語教育の長い歴史と伝統を誇り、在籍者のほとんどが華人子女の端華学校と立群学校という2校の華人学校に限定した。インドネシアでは外国語として中国語が学ばれているため、主として華人が学ぶ学校ということではなく、比較的華人の集中した地域であるスマラン市、サラティガ市、スラバヤ市の計10校の小中高校を対象とした。タイも上述したとおり、外国語の一つとして中国語ないし漢語が学ばれるのであるが、調査実施校にはグアンジャオ校、トライミット校など、華人子女が比較的多い学校も含まれている。ベトナムでは華人が集中している南部のホーチミン市以外に、南部のバックリエウ省、北部のランソン省、ハノイ市と、全国のかなり広範囲な小中高校で調査を実施することができた。

これらの質問紙調査への回答者数は、カンボジア631人、タイ367人、インドネシア843人、ベトナム617人の合計2,458人である。回答者の属性について述べると、学年を記入した2,452人中、高校生が1,116人(45.5%)と半数強を占めた。次いで小学生が917人(37.4%)であり、中学生が419人(17.1%)と、高校生に偏ったサンプルになっている。そのため、学校種別、年齢・学年別の分析は敢えて控えた。性別に関しては、性別を記入した2,432人のうち、男子1,005人(41.3%)、女子1,427人(58.7%)である。

(1) 華裔か否か

回答者のエスニシティに関して、「あなたは華裔(華僑・華人の子孫)ですか」という質問に答えた2,416人のうち、全体の66.7%が「はい」と答えた。国別に見ると、カンボジア、タイ、インドネシア、ベトナムの順に高い比率になっている。各国の全体としての華人人口が占める比率ひとつ取っても、上述したとおり、既存の利用しうる統計によってかなりまちまちであり、確実な数字を明示することは困難である。しかし、ほぼ総人口の数パーセントから高い推計でも約10%であり、いずれの国も本調査対象者のうち華人が占める比率は、当該国全体の華人人口比に照らしてすこぶる高い。従って、全国民中の華人を母集団とするならば、本調査対象者は母集団の姿を反映してはいない。ちなみに、各国での調査対象校はカンボジアがすべて華人学校であることを除いて、他の3か国は華人学校と

それ以外の一般の学校において漢語教育を実施しているところが混在している。一方、カンボジアのように華人学校といっても、非華裔子女が在籍しているのである。以下、質問紙各項目への回答の分析では、国別の回答の比較分析および華裔か否かによる回答の差の比較を通じて、国情とエスニシティが華語教育の在り方に及ぼす影響について、知見を得ることが可能となろう。

表1. 「あなたは華裔ですか」への回答 ($\chi^2=299.604, df=3, p<.001$)

			問：華裔ですか		合計
			はい	いいえ	
国	カンボジア	度数	549	64	613
		国の %	89.6%	10.4%	100.0%
		総和の %	22.7%	2.6%	25.4%
	タイ	度数	254	112	366
		国の %	69.4%	30.6%	100.0%
		総和の %	10.5%	4.6%	15.1%
	インドネシア	度数	552	285	837
		国の %	65.9%	34.1%	100.0%
		総和の %	22.8%	11.8%	34.6%
	ベトナム	度数	257	343	600
		国の %	42.8%	57.2%	100.0%
		総和の %	10.6%	14.2%	24.8%
合計	度数	1612	804	2416	
	国の %	66.7%	33.3%	100.0%	
	総和の %	66.7%	33.3%	100.0%	

(2) 日常的に華語・漢語が使われる頻度

「あなたの家や親戚の中に華語を日常的に使う人がいますか」という問いに対して、回答者全員の回答を見ると、表2の合計欄のように、肯定57.3%、否定42.7%と家の中で日常的に華語・漢語を使う人がいると答えた者が多かった。華裔のみに限って見てみると、表2の上段のように、回答者の4分の3もの家庭に漢語を日常的に使う人がいることが分かる。これら華裔の子どもたちは、日常的により多く華語に触れる機会があるように見える。

表2. 華裔か非華裔かによる漢語の使用頻度の差 ($\chi^2=655.477, df=3, p<.001$)

			問：家の中での華語使用		合計
			はい	いいえ	
問D華裔	はい	度数	1210	387	1597
		問D華裔の %	75.8%	24.2%	100.0%
		総和の %	50.5%	16.1%	66.6%
	いいえ	度数	164	636	800
		問D華裔の %	20.5%	79.5%	100.0%
		総和の %	6.8%	26.5%	33.4%
合計	度数	1374	1023	2397	
	問D華裔の %	57.3%	42.7%	100.0%	
	総和の %	57.3%	42.7%	100.0%	

また、国別に見てみると、表3に示すように、回答者の9割弱が華裔であるカンボジアでは肯定する比率が69.2%と最も高かったのに対して、回答者の42.8%が華裔であるベトナムでは、当然のように、その半分程度に過ぎない。華裔・非華裔の比率と家庭内での漢語の使用頻度を見比べると、インドネシアはほぼ拮抗しているのに対して、タイは家庭内での漢語使用率がいくぶん低く、ベトナムはさらに低い。カンボジアの調査対象校が華人学校であり、ベトナムは一般の学校であったことを斟酌

しても、タイやインドネシアの場合も華人学校に限定したわけではない点ではベトナムと同様であるので、ベトナムの家庭の中で漢語が日常的に使われる度合いがとくに低いように見える。

表 3. 国別に見た家の中での漢語の使用状況 ($\chi^2=172.933, df=3, p<.001$)

			問E家中華語		合計	
			はい	いいえ		
国	カンボジア	度数	426	190	616	
		国の%	69.2%	30.8%	100.0%	
		総和の%	17.5%	7.8%	25.3%	
	タイ	度数	220	147	367	
		国の%	59.9%	40.1%	100.0%	
		総和の%	9.1%	6.0%	15.1%	
	インドネシア	度数	533	306	839	
		国の%	63.5%	36.5%	100.0%	
		総和の%	21.9%	12.6%	34.5%	
	ベトナム	度数	213	395	608	
		国の%	35.0%	65.0%	100.0%	
		総和の%	8.8%	16.3%	25.0%	
合計			度数	1392	1038	2430
			国の%	57.3%	42.7%	100.0%
			総和の%	57.3%	42.7%	100.0%

(3) 英語および他の外国語の学習

外国語学習の中での漢語の位置を確認するための問い「あなたは漢語以外に学校で英語を学んでいますか」に対して、表 4 の合計欄のように、回答した総数 2,422 人のうちの圧倒的多数である 2,156 人 (88.9%) が英語を学んでいると答えている。カンボジアでは、英語を学んでいない者の比率が 22.4% と相対的に高く、これは調査対象校が華人学校であることによるものであるが、同国の華人学校でも近年では英語に対する需要の高まりと、より多くの児童・生徒を引きつける方策として、華語の他にクメール語と英語を取り入れたトリリンガル教育を実施する学校が増えていることは上述したとおりである。

表 4. 英語学習の有無 ($\chi^2=208.228, df=3, p<.001$)

			問：英語学習の有無		合計	
			はい	いいえ		
国	カンボジア	度数	475	137	612	
		国の%	77.6%	22.4%	100.0%	
		総和の%	19.6%	5.7%	25.2%	
	タイ	度数	361	6	367	
		国の%	98.4%	1.6%	100.0%	
		総和の%	14.9%	.2%	15.1%	
	インドネシア	度数	823	18	841	
		国の%	97.9%	2.1%	100.0%	
		総和の%	34.0%	.7%	34.7%	
	ベトナム	度数	497	107	604	
		国の%	82.3%	17.7%	100.0%	
		総和の%	20.5%	4.4%	24.9%	
合計			度数	2156	268	2424
			国の%	88.9%	11.1%	100.0%
			総和の%	88.9%	11.1%	100.0%

英語学習に関する問いに続いて「華語以外に（英語以外の）別の言語を学んでいますか」という問いに対して回答した者のうち、表 5 の合計欄に示すように、約 4 分の 3 の児童・生徒は他の言語を学んではおらず、なかでもベトナムでは 91.3% が他の言語を学んでいない。

表5. 学校での他言語学習の有無 ($\chi^2=214.021, df=3, p<.001$)

			問：他言語学習の有無		合計
			はい	いいえ	
国	カンボジア	度数	161	448	609
		国の%	26.4%	73.6%	100.0%
		総和の%	6.6%	18.5%	25.1%
	タイ	度数	186	180	366
		国の%	50.8%	49.2%	100.0%
		総和の%	7.7%	7.4%	15.1%
	インドネシア	度数	260	579	839
		国の%	31.0%	69.0%	100.0%
		総和の%	10.7%	23.9%	34.6%
	ベトナム	度数	53	555	608
		国の%	8.7%	91.3%	100.0%
		総和の%	2.2%	22.9%	25.1%
合計	度数	660	1762	2422	
	国の%	27.3%	72.7%	100.0%	
	総和の%	27.3%	72.7%	100.0%	

(4) 漢語の学習歴

回答者の漢語学習歴を尋ねた質問に対する回答者全員の分布は、表6のように、半年以内 348人 (14.3%)、半年～1年未満 162人 (6.7%)、1年以上2年未満 220人 (3.0%)、2年以上3年未満 232人 (9.5%)、3年以上 1,469人 (60.4%)と、回答者総数 2,431人のうち6割もが漢語を3年以上学んでいる。国別に見てみると、カンボジアでは3年以上の長期間にわたり漢語を学んでいる者の比率が94.9%と高い。一方、ベトナムでは3年以上学んでいる者が44.7%に対して、30.6%は半年以内と、まだ学習を始めて間もない子ども達である。

表6. 漢語の学習歴 (回答者全員)

			問：漢語の学習歴					合計
			半年以内	半年以上～1年未満	1年以上～2年未満	2年以上～3年未満	3年以上	
国	カンボジア	度数	1	8	21	2	595	627
		国の%	.2%	1.3%	3.3%	.3%	94.9%	100.0%
		総和の%	.0%	.3%	.9%	.1%	24.5%	25.8%
	タイ	度数	15	59	43	83	165	365
		国の%	4.1%	16.2%	11.8%	22.7%	45.2%	100.0%
		総和の%	.6%	2.4%	1.8%	3.4%	6.8%	15.0%
	インドネシア	度数	147	62	82	105	439	835
		国の%	17.6%	7.4%	9.8%	12.6%	52.6%	100.0%
		総和の%	6.0%	2.6%	3.4%	4.3%	18.1%	34.3%
	ベトナム	度数	185	33	74	42	270	604
		国の%	30.6%	5.5%	12.3%	7.0%	44.7%	100.0%
		総和の%	7.6%	1.4%	3.0%	1.7%	11.1%	24.8%
合計	度数	348	162	220	232	1469	2431	
	国の%	14.3%	6.7%	9.0%	9.5%	60.4%	100.0%	
	総和の%	14.3%	6.7%	9.0%	9.5%	60.4%	100.0%	

(5) 漢語学習への興味・関心

学習歴の長短はあるものの、漢語学習が「面白い」か否かを尋ねたところ、約9割と圧倒的多数が「面白い」と回答した。表7に示すように、とくにカンボジアでは回答者全員が「面白い」と答えている。華裔か否かによる「面白い」と感じる度合いの違いがあるかを見たところ、「面白い」と答えた

者の比率は、華裔 89.8%、非華裔 87.8%と、ほとんど差がなかった。

表 7. 「漢語学習が面白いか」 ($\chi^2=109.421, df=3, p<.001$)

			問I漢語学習は面白いか		合計
			面白い	面白くない	
国	カンボジア	度数	626	0	626
		国の %	100.0%	0.0%	100.0%
		総和の %	25.7%	0.0%	25.7%
	タイ	度数	299	67	366
		国の %	81.7%	18.3%	100.0%
		総和の %	12.3%	2.7%	15.0%
	インドネシア	度数	727	112	839
		国の %	86.7%	13.3%	100.0%
		総和の %	29.8%	4.6%	34.4%
	ベトナム	度数	520	86	606
		国の %	85.8%	14.2%	100.0%
		総和の %	21.3%	3.5%	24.9%
合計	度数	2172	265	2437	
	国の %	89.1%	10.9%	100.0%	
	総和の %	89.1%	10.9%	100.0%	

(6) 漢語学習の難易

漢語学習が難しいと感じているかどうかを尋ねたところ、表 8 に示すように、「難しい」とする者がいずれの国でも過半数を占めたが、とくにタイは 8 割もの多数が「難しい」と答えたのが際立っている。また、華裔と非華裔との差については、4 か国全体で「難しい」とする者は華裔 58.2%、非華裔 65.7%と、華人の血統を受け継がない者のほうに難しさを感じている者が多く、これには統計的に有意な差が認められる ($\chi^2=12.541, df=3, p<.001$)。

表 8. 「漢語学習は難しいか」 ($\chi^2=68.919, df=3, p<.001$)

			問J難易		合計
			難しい	難しくない	
国	カンボジア	度数	346	277	623
		国の %	55.5%	44.5%	100.0%
		総和の %	14.2%	11.4%	25.6%
	タイ	度数	294	73	367
		国の %	80.1%	19.9%	100.0%
		総和の %	12.1%	3.0%	15.1%
	インドネシア	度数	484	349	833
		国の %	58.1%	41.9%	100.0%
		総和の %	19.9%	14.3%	34.2%
	ベトナム	度数	355	255	610
		国の %	58.2%	41.8%	100.0%
		総和の %	14.6%	10.5%	25.1%
合計	度数	1479	954	2433	
	国の %	60.8%	39.2%	100.0%	
	総和の %	60.8%	39.2%	100.0%	

「面白い」と感じるごとと漢語学習が「難しい」と感じることの間には、相関が見られるのではないと思われる。「漢語学習は面白いか」への回答と「漢語学習は難しいか」への回答をクロスさせてみたところ、表 9 の回答者全員の状況に示すとおり、やはり「難しい」と感じているものは「面白くない」と感じているのである。

表 9. 「漢語学習は面白いか」と「難しいか」とのクロス表 ($\chi^2=100.073, df=1, p<.001$)

			問J難易		合計
			難しい	難しくない	
問I有意思	面白い	度数	1232	920	2152
		問I面白いの %	57.2%	42.8%	100.0%
		総和の %	51.1%	38.1%	89.2%
	面白くない	度数	233	28	261
		問I面白いの %	89.3%	10.7%	100.0%
		総和の %	9.7%	1.2%	10.8%
合計			1465	948	2413
			60.7%	39.3%	100.0%
			60.7%	39.3%	100.0%

次に、華人の血統を引くことが漢語学習の難易感とどのように関連するかを国別に見たのが表 10 である。華裔であることは漢語学習を難しくないと感じる要因であると推測されるが、タイのみは華裔か否かが漢語学習の難易度に例外的にそれほど影響を及ぼしていないように思われる。

表 10. 国別に見た華裔・非華裔の漢語学習難易度 ($\chi^2=258.571, df=3, p<.001$)

				カンボジア	タイ	インドネシア	ベトナム	合計
難しい	問D華裔	はい	度数	294	204	327	106	931
			問D華裔の %	31.6%	21.9%	35.1%	11.4%	100.0%
			総和の %	20.2%	14.0%	22.5%	7.3%	64.1%
		いいえ	度数	38	89	156	238	521
			問D華裔の %	7.3%	17.1%	29.9%	45.7%	100.0%
			総和の %	2.6%	6.1%	10.7%	16.4%	35.9%
	合計			332	293	483	344	1452
				22.9%	20.2%	33.3%	23.7%	100.0%
				22.9%	20.2%	33.3%	23.7%	100.0%
難しくない	問D華裔	はい	度数	248	50	221	150	669
			問D華裔の %	37.1%	7.5%	33.0%	22.4%	100.0%
			総和の %	26.4%	5.3%	23.5%	15.9%	71.1%
		いいえ	度数	25	23	124	100	272
			問D華裔の %	9.2%	8.5%	45.6%	36.8%	100.0%
			総和の %	2.7%	2.4%	13.2%	10.6%	28.9%
	合計			273	73	345	250	941
				29.0%	7.8%	36.7%	26.6%	100.0%
				29.0%	7.8%	36.7%	26.6%	100.0%
合計	問D華裔	はい	度数	542	254	548	256	1600
			問D華裔の %	33.9%	15.9%	34.3%	16.0%	100.0%
			総和の %	22.6%	10.6%	22.9%	10.7%	66.9%
		いいえ	度数	63	112	280	338	793
			問D華裔の %	7.9%	14.1%	35.3%	42.6%	100.0%
			総和の %	2.6%	4.7%	11.7%	14.1%	33.1%
	合計			605	366	828	594	2393
				25.3%	15.3%	34.6%	24.8%	100.0%
				25.3%	15.3%	34.6%	24.8%	100.0%

漢語学習歴が3年以上と、漢語にかなり習熟していると考えられる者に限定して、発音、文法、文字の書き方の3領域に関して、それぞれ「難しい」「難しくない」と感じている者の国別人数と比率を示したのが表 11 である。地域と漢語学習の各領域の困難さとの関連を見ると、発音と書き方では0.1%水準、文法では1%水準で有意であることが確認された。タイ語は中国語と同じシナ=チベット語族に属して広東語に近く、ベトナム語は何千年も中国語の影響を受けたことから多くの漢語起源の単語

が含まれるものの、モン＝クメール語族で別の分類に属することなどが思い浮かぶ。但し、この結果には、学習者の姿勢、教員の資質・能力などの要因が絡むこともあり、原因の特定は容易ではない。

表 11. 学習歴 3 年以上の者の漢語学習の領域別難易度

		発音 ($\chi^2=62.939, df=3, p<.001$)			文法 ($\chi^2=12.177, df=3, p<.01$)			書き方 ($\chi^2=65.404, df=3, p<.001$)		
		難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計
カンボジア	人数	316	277	593	398	188	586	228	362	590
	%	53.3%	46.7%	100.0%	67.9%	32.1%	100.0%	38.6%	61.4%	100.0%
タイ	人数	102	63	165	120	43	163	95	70	165
	%	61.8%	38.2%	100.0%	73.6%	26.4%	100.0%	57.6%	42.4%	100.0%
インドネシア	人数	285	150	435	287	146	433	268	167	435
	%	65.5%	34.5%	100.0%	66.3%	33.7%	100.0%	61.6%	38.4%	100.0%
ベトナム	人数	96	172	268	157	112	269	108	160	268
	%	35.8%	64.2%	100.0%	58.4%	41.6%	100.0%	40.3%	59.7%	100.0%
合計	数	799	662	1461	962	489	1451	699	759	1458
	%	54.7%	45.3%	100.0%	66.3%	33.7%	100.0%	47.9%	52.1%	100.0%

表 12 は、華人の血統を引くか否かで、発音、文法、文字の書き方のうち、何が難しいと感じるかを探ったものである。発音を除いて文法および書き方ではそれぞれ 5%水準、0.1%水準で有意差が認められる。ちなみに、性別で見た結果では、文法、書き方に関する結果に男女間で統計的な有意差が見られなかったのに対して、発音が難しいとする男子 61.1%、女子 49.5%という結果に関してのみ、統計的な有意差が確認された ($\chi^2=31.567, df=1, p<.001$)。

表 12. 華人の血統の有無と漢語学習で難しく感じる領域

			問K発音難			問L文法難*			問M写字難***		
			難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計	難しい	難しくない	合計
問D華裔	はい	度数	885	721	1606	1037	558	1595	784	815	1599
		問D華裔の%	55.1%	44.9%	100.0%	65.0%	35.0%	100.0%	49.0%	51.0%	100.0%
		総和の%	36.9%	30.0%	66.9%	43.4%	23.3%	66.7%	32.7%	34.0%	66.8%
	いいえ	度数	429	366	795	550	245	795	550	245	795
		問D華裔の%	54.0%	46.0%	100.0%	69.2%	30.8%	100.0%	69.2%	30.8%	100.0%
		総和の%	17.9%	15.2%	33.1%	23.0%	10.3%	33.3%	23.0%	10.2%	33.2%
合計	度数	1314	1087	2401	1587	803	2390	1334	1060	2394	
	問D華裔の%	54.7%	45.3%	100.0%	66.4%	33.6%	100.0%	55.7%	44.3%	100.0%	
	総和の%	54.7%	45.3%	100.0%	66.4%	33.6%	100.0%	55.7%	44.3%	100.0%	
			$(\chi^2=281, df=1, p <.596)$			$(\chi^2=4.129, df=1, p <.05)$			$(\chi^2=87.398, df=1, p <.001)$		

(7) 漢語学習の理由

本質問紙調査では、児童・生徒がどういう理由から漢語を学ぶようになったのかも尋ねた (3 つまでの複数選択可)。その国別の結果を示したのが表 13 である。漢語を学んでおけば「将来役に立つだろう」からという現実主義的な認識を持っている子どもが多いことが分かる。それというのも漢語が英語と並ぶ国際的な言語だからという認識に裏打ちされているからであり、この 2 つの理由がほぼ拮

抗している。自由記述欄に「中国は非常に速く発展している国だから、中国語も将来国際語になるだろう」（カンボジア、高1、男子）「中国語を勉強すれば、奨学金と仕事を得る機会が多いから（英語を除いて）」（ベトナム、高1、女子）と書いた生徒もいた。それ以外では、もともと漢語自体に漠然としたものであっても「興味があった」からとか、「中国の文化や歴史に関心があり」、それらにより深く接近する手段として漢語を学ぶという理由が約3割比較的多くの者によって挙げられた。また、「親の勧め」によつた者も3割を占めている。「友人が漢語を選択して学んでいる」から自分も選択したという消極的理由を挙げた者は少なく、漢語学習はほぼ積極的な理由から行っていると考えられる。自由記述欄に、「中国の音楽グループが好きだから」（ベトナム、高1、女子）「入試の結果、中国語クラスに配属されたから」（ベトナム、高3、女子）と記述した生徒もいた。ベトナムでは成績上位者は英語クラスに配属されることが自由記述意見から読み取れる²²。また各理由に関する男女別の回答を見ると、「元々興味があった」という理由を選んだ者（男子27.0%、女子37.7%）についてだけが、他の理由と違って、統計的な有意差が確認できた（ $\chi^2=30.619$, $df=1$, $p<.001$ ）。

表13. 漢語学習を選んだ理由（回答者全員）

			将来有用	元々興味あり	文化・歴史への関心	国際語だから	親の勧め	友人が選択
国	カンボジア	度数	587	273	311	511	106	15
		国の%	93.00%	43.30%	49.30%	81.00%	16.80%	2.40%
		総和の%	23.90%	11.10%	12.70%	20.80%	4.30%	6.00%
	タイ	度数	270	116	62	265	170	40
		国の%	73.60%	31.60%	16.90%	72.20%	46.30%	10.90%
		総和の%	11.00%	4.70%	2.50%	10.80%	6.90%	1.60%
	インドネシア	度数	436	201	153	389	190	34
		国の%	51.70%	23.80%	18.10%	46.10%	22.50%	4.00%
		総和の%	17.70%	8.20%	6.20%	15.80%	7.70%	1.40%
	ベトナム	度数	286	223	212	402	275	76
		国の%	46.40%	36.10%	34.40%	65.20%	44.60%	12.30%
		総和の%	11.60%	9.10%	8.60%	16.40%	11.20%	3.10%
合計	度数	1579	813	738	1567	741	166	
	国の%	64.20%	33.10%	30.00%	63.80%	30.10%	6.70%	
	総和の%	64.20%	33.10%	30.00%	63.80%	30.10%	6.70%	

次に、とくに華裔のみに限って、漢語選択の理由を見てみたのが表14である。カンボジアとタイの華裔は「将来役に立つだろう」「国際語だから」という実用的観点から漢語の学習を選んだ者の比率がとくに高い。一方、「親の勧め」で選択した者の比率が高いのはタイとベトナムであり、とくにベトナムは華裔だけに絞って見た場合、同国の華裔・非華裔を問わない場合の回答に比べて約2割も高くなっている。統計的にも有意であり、親世代の華語ないし漢語へのこだわりの表すものと言えるであろう。自由記述意見の中に、「家族全員が華人だから、両親は私に祖先の言葉である漢語を学ぶように勧めた」（ベトナム、中2、女子）「私は華人であり、父母は漢語を学ぶようにと言った」（ベトナム、中4、男子）「私の目的は将来漢語を学ぶ基礎を固めた上で、将来日本語を学びたい。漢語と日本語は近いので、漢語をしっかりと学んでおけば、将来日本語を学ぶにも役立つ」（ベトナム、中4、男子）などを見ることができる。

表 14. 華裔に限って見た国別の漢語選択理由 ($\chi^2=221.617, df=3, p<.001$)

			将来有用	元々興味あり	文化・歴史への関心	国際語だから	親の勧め	友人が選択
国	カンボジア	度数	514	245	271	442	85	11
		国の%	93.6%	44.6%	49.4%	80.5%	15.5%	2.0%
		総和の%	31.9%	15.2%	16.8%	27.4%	5.3%	.7%
	タイ	度数	183	76	47	183	129	26
		国の%	72.0%	29.9%	18.5%	72.0%	50.8%	10.2%
		総和の%	11.4%	4.7%	2.9%	11.4%	8.0%	1.6%
	インドネシア	度数	279	108	103	248	167	29
		国の%	50.5%	19.6%	18.7%	44.9%	30.3%	5.3%
		総和の%	17.3%	6.7%	6.4%	15.4%	10.4%	1.8%
	ベトナム	度数	122	76	81	142	164	47
		国の%	47.5%	29.6%	31.5%	55.3%	63.8%	18.3%
		総和の%	7.6%	4.7%	5.0%	8.8%	10.2%	2.9%
合計	度数	1098	505	502	1015	545	113	
	国の%	68.1%	31.3%	31.1%	63.0%	33.8%	7.0%	
	総和の%	68.1%	31.3%	31.1%	63.0%	33.8%	7.0%	

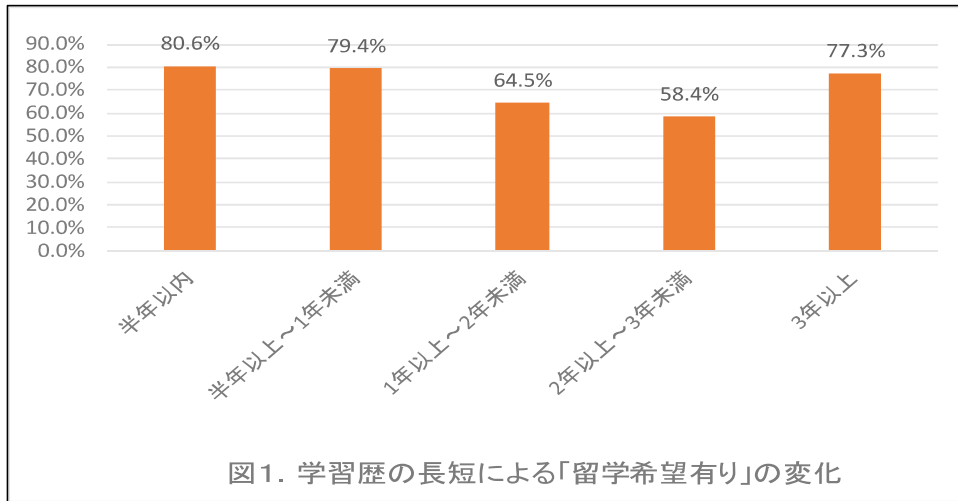
(8) 留学希望の有無

「機会があれば、将来中国（台湾、香港を含む）に留学したいと思いますか」という問いに対して、表 15 に示すように、「留学したい」と回答したのは 75.2%であり、「留学したくない」と回答した者 24.8%の 3 倍に相当する。華裔に絞って国別に見た場合の留学希望の比率は、華裔に限らない場合とほとんど同一である。なお、男女別に見たところ、男子の 69.3%と女子の 79.1%が「留学したい」と回答しており、留学に対して女子のほうがより積極的であり、統計的にも有意差が認められた ($\chi^2=29.964, df=1, p<.001$)。

表 15. 華裔・非華裔による留学希望の差 ($\chi^2=16.615, df=1, p<.001$)

			問N留学希望		合計
			はい	いいえ	
問D華裔	はい	度数	1228	352	1580
		問D華裔の%	77.7%	22.3%	100.0%
		総和の%	51.7%	14.8%	66.5%
	いいえ	度数	557	238	795
		問D華裔の%	70.1%	29.9%	100.0%
		総和の%	23.5%	10.0%	33.5%
合計	度数	1785	590	2375	
	問D華裔の%	75.2%	24.8%	100.0%	
	総和の%	75.2%	24.8%	100.0%	

学習歴の長さにより留学希望も変化する可能性がある。図 1 に見られるように、漢語を学び始めて間もないうちは留学希望を持つ者が 8 割以上と多いことが分かる。しかし、学習を続けるうちに、上述したとおり、漢語の難しさを自覚する場面が多くなると推測され、徐々に留学希望の比率が下がるが、3 年以上学んだ者は初学者と違って、言語修得に対する自信も相俟って、再び留学を希望する者が増えるように思える。



また、ここでは国による差が見られる。表 16 に示すように、ベトナムは他の 3 か国に比べて、「留学したい」が 59.6%と、カンボジアに比べて 30%、平均に比べても 15%も低いのである。当該国に対する好感度調査、例えば BBC が実施する Country Rating Poll のようなデータが利用可能であれば好都合だが、4 か国をカバーしていないため、対中貿易比率（当該国の輸出・輸入総額に占める対中貿易額の比率の計）²³で代替すると、最も高比率で緊密な関係を有していると思われるベトナムが、留学希望を持つ者の比率に関しては却って最も低いという逆転現象が見られるのである。一方、上述したとおり、ベトナムは親世代の勧めで漢語学習を始めたケースが最も多かったのである。古くは冊封関係の下、中国に服従するとともに、科挙制度をはじめとする文化的影響を強く受け、また、ベトナム戦争中には中国が受け入れた外国人留学生のうちで桁外れに多くのベトナム人学生が中国に赴いた²⁴反面、中越戦争や南沙諸島をめぐる領有権問題など愛憎相半ばする中で、この留学希望の有無についても、その解釈は容易ではない。

表 16. 中華世界への留学希望の有無 ($\chi^2=151.853, df=3, p<.001$)

国	カンボジア (対中貿易率 18.92%)	タイ (対中貿易率 14.26%)	インドネシア (対中貿易率 16.08)	ベトナム (対中貿易率 20.63%)	問N留学希望		合計
					はい	いいえ	
	度数	551	60	611			
	国の %	90.2%	9.8%	100.0%			
	総和の %	22.8%	2.5%	25.3%			
	度数	275	90	365			
	国の %	75.3%	24.7%	100.0%			
	総和の %	11.4%	3.7%	15.1%			
	度数	623	206	829			
	国の %	75.2%	24.8%	100.0%			
	総和の %	25.8%	8.5%	34.4%			
	度数	362	245	607			
	国の %	59.6%	40.4%	100.0%			
	総和の %	15.0%	10.2%	25.2%			
合計	度数	1811	601	2412			
	国の %	75.1%	24.9%	100.0%			
	総和の %	75.1%	24.9%	100.0%			

4か国のうち、タイは 2006 年から始まって 4 か所、カンボジアは 2009 年に 1 か所、インドネシアは 2010 年に 6 か所と、孔子学院の設置にかなり積極的であり、早期に受け入れている。これに対して、ベトナムのみは動きが鈍く、2013 年 10 月の李克強首相の訪問時に話し合われ、ハノイ大学に設置することがようやく決まったものの、運営が軌道に乗るには今暫く時間を要する状態²⁵であること

に見られるように、対中貿易額では4か国中トップとはいえ、漢語や中国文化の受入れにはかなり慎重さが見られる。こうしたベトナムの国全体としての対中感情は、児童・生徒の留学希望の結果にも表れているといえよう。

4. おわりに

以上、東南アジア4か国における華僑・華人および華語・漢語教育が辿ってきた歴史を概観するとともに、華語・漢語に対する抑圧ないし使用禁止策が解かれた後に展開された華語・漢語教育に対して児童・生徒がどのような意識を持っているかを具体的に検討してきた。ここで、小論で明らかになった要点を改めて確認しておくことで結びとしたい。

第一に、華人の血統を引く者のみならず、4か国の児童・生徒の間に広く漢語学習熱の高まりを確認できた。彼らの間には、質問紙調査を通じて、漢語に対する興味・関心の高さや有用性への強い意識が見られる。漢語を学ぶ理由として、その国際性や実用性を挙げた者が6割以上を占めた。なお、回答者全体の88.9%が学校で漢語の他に英語を学んでいる。

第二に、漢語への興味では、漢語学習が「面白い」とした者が約9割を占め、華裔と非華裔の間でほとんど差はない。一方、難易感では非華裔のほうがより「難しい」と感じている。漢語学習が「難しい」と感じている者は、全体として、華裔58.2%、非華裔65.7%であるが、タイでは「難しい」とする者が全体で80.1%、華裔のみの比率が全体の80.3%と、突出して高い。

第三に、「あなたの家や親戚の中に華語を日常的に使う人がいますか」という問いに対して、肯定57.3%、否定42.7%である。華裔に絞れば全体の4分の3もの家庭で漢語を日常的に使う人がいる。華裔の場合、このように家庭で華語や漢語に触れる機会がやはり多いことが、漢語学習への取り組みを容易にしていることが窺える。しかし、ベトナムのみは家庭内での日常的な漢語の使用について、肯定35.0%、否定65.0%と逆転している。

第四に、「面白い」と感じることと難易度感との関係や、国別および華裔・非華裔の差により発音、文法、書き方のうちの何が「難しい」と感じるかを分析すると、書き方を典型として、統計的に有意な差のある違いも見られ、漢語と各言語との距離ないし親近度からの解釈が可能と思われる。

第五に、漢字圏諸国・地域への留学希望については、「留学したい」75.2%、「留学したくない」24.8%と、全体として留学希望者が3倍も多い一方、ベトナムは対中貿易額では4か国中トップとはいえ、孔子学院の設置に相当に慎重であったように、対中感情は長い歴史的経緯の中で複雑と見え、留学希望者が平均より15%も低い結果を示した。それは漢語学習歴の相対的短さにも表れている。

(本稿は平成26~28年度JSPS科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)課題番号26381133「中国の対外言語教育政策に関する研究—孔子学院の世界展開を中心に—」の研究成果の一部である。)

【注】

¹ “Top Ten Languages Used in the Web- June 30, 2015” Internet World Stats
(<http://www.internetworldstats.com/stats7.htm> 2015.12.1 閲覧)

² 「母語」と「非母語」を話す人々を含み、人口調査、住民のサンプル調査、ラジオ・テレビ放送の調査、人口動態調査、間接的調査その他を基に導きだされたワシントン大学心理学部のシドニー・S・カルバート教授が編纂した資料から百分比を計算すると、主な言語の世界人口に占める比率は、マンダリン語(漢語)の比率は1958年15.6%、1970年16.6%、1980年15.8%、1992年15.2%であり、英語の1958年9.8%、1970年9.1%、1980年8.7%、1992年7.6%を上回っているという(サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳『文明の衝突と21世紀の日本』集英社新書0015、2000年、95頁)。

³ 高偉濃・万曉宏「東南亜華文教育発展—東南亜華人情況2002年回顧與2003年前瞻之二」『東南亜縦横』2003年6期、<http://mall.cnki.net/magazine/Article/DLYZ200306008.htm> で2015年12月5

日閲覧。

4 周聿峨『東南亜華文教育』暨南大学出版社、1995年、373頁。

5 同上、374頁。

6 Joshua Project のホームページによる (<http://joshuaproject.net/countries/CB>、2015年12月5日閲覧)。

7 東華理事総会文教処、「柬埔寨華文教育現状」『東華理事総会成立十三周年紀念特刊』出版年記載なし、98頁には、1991年12月から92年8月にかけて数校が授業を再開したと記されているが、立群学校長によれば、同校の前身である坡隆辺学校は91年2月にはすでに授業を再開していたという。

8 中華民国僑務委員会の統計を引用した玉置充子「タイ華人と中国語教育」『海外事情』2007年9月号、49～50頁による。しかし、Joshua Project のホームページによれば、華人口は159万3,000人で総人口の2.4%に当たるとされる。<http://joshuaproject.net/countries/TH>

9 Joshua Project のホームページによれば、現時点での華人口は159万3,000人で総人口の2.4%に当たるとされる。<http://joshuaproject.net/countries/TH>

10 李屏「泰国華文教育史研究総述」『東南亜縦横』2012年第8期、32～33頁。

11 李屏、前掲論文、34頁。

12 村田翼夫『タイにおける教育発展—国民統合・文化・教育協力—』東信堂、2007年、164頁および172頁。

13 樋泉克夫「タイにおける<華僑文化>の一端—僑校・華語・華報—」『人文学部紀要』第22号、和光大学、1987年、129～130頁及び村田、前掲書、174～176頁。

14 鈴木康郎「タイにおける華人系学校政策の動向—規制緩和措置の検討を中心として—」『比較・国際教育』第3号、筑波大学比較・国際教育学研究室、1995年、88～89頁。

15 玉置充子「タイ華人社会における華語教育の現状」拓殖大学華僑研究センター『ニュースレター』第4号、2007年3月20日、<http://www.cocs.takushoku-u.ac.jp/nl7/2.htm>

16 陳燕南「インドネシア華人とその経済的地位」拓殖大学華僑研究センター『ニュースレター』第4号、2005年7月8日 (<http://www.cocs.takushoku-u.ac.jp/nl4/1.htm> で閲覧)。なお、Joshua Project の統計によれば、インドネシアにおける華人口は469万4,000人で、総人口の1.8%に当たるとされる (<http://joshuaproject.net/countries/ID> 2015年12月5日閲覧)。

17 周聿峨・陳雷「転変中的印尼華文教育」<http://edu.sina.com.cn/s/19940.shtml>。

18 「印尼教育部聘請漢語教育顧問」『華声報』2001年2月6日、<http://edu.sina.com.cn/s/19940.shtml> インドネシアのみに焦点を絞った論考として、筆者による「インドネシア地方都市における漢語教育」『大学教育論叢』創刊号、2015年3月、49～65頁がある。

19 Joshua Project ホームページ <http://joshuaproject.net/countries/VM> (2015年12月5日アクセス)。『西貢解放日報』2010年8月25日には「ベトナム国民を構成する54の民族のうち、キン(京)族を除いて、華族ないし華人の人口が最多であり、ホーチミン市の800万人の人口のうち、40万人を華人が占めており、これは全国の地域の中で最多である。」と記されている。

20 多民族国家ベトナムにおいて、初等教育の完全普及という国家的課題が達成された後に取り組みられるべき課題として、各構成民族の個性、文化特性にまで配慮し、民族的観点に立ったきめ細かい教育内容面での対応や教育実践が行われるべきではないかとの論点から、少数民族の1つである華人(華族)の民族言語教育の在り方を考察した論考として、拙稿「ベトナム初等教育の『普遍化』と『差異化』—華人のための華語教育をめぐって—」潮木守一編著『ベトナムにおける初等教育の普遍化政策』明石書店、2008年、127～145頁がある。

21 調査校との連絡その他に関して、カンボジアでは同国教育省のグオン・ソクチェン (Nguon Sokcheng) 博士、タイでは広島大学大学院国際協力研究科の牧貴愛准教授、インドネシアのスラバヤ市での調査に当たっては、ジョグジャカルタ大学教育学部主任のアイリーン・アストゥティ (Siti Irene Astuti D.) 博士、ベトナムでは同国社会科学アカデミーのファン・タン・ギ (Pham Thanh Nghi) 教授の協力を得た。付記して謝意を表したい。

22 ハノイのエリート校であるアムステルダム高校の生徒の回答には、「英語クラスには入学できなかった。中国語かロシア語クラスにまず入学して、後で英語クラスに編入するつもり」とか、「英語クラス1と英語クラス2に合格しなかったから」と言った記述が見られる。

²³ 中国とアセアン諸国との貿易額については、ASEAN-China Center および中国国家统计局による統計数字から計算した。

²⁴ 1965年に中国が受け入れた外国人留学生 3,312 人のうち、対米戦を戦うベトナム支援の意味から、中国は全外国人留学生数の 0.97%に相当する 3,200 人もの多くのベトナム人学生を受け入れた（中華人民共和国教育部計画財務司編『中国教育成就 統計資料 1949—1983』人民教育出版社、1984年、136頁）。

²⁵ 2015年8月11日に筆者がハノイ大学国際交流センターの Ngoc Tan 主任に対して行ったインタビューによる。すでに孔子学院のプレートが掲げられ、施設の改修が進んでいるが、実際の活動は始まっていない。